

[制作記録]

## 現代日本画における風景の表現について — 四季の風景を描く —

西出茂弘

ここ数年、日本の風景を題材として制作している。取材は主に能登半島・白山周辺や富山・新潟の日本海から信州の山間部が多い。毎年5月初旬に郊外写生授業で学生と信州方面に出かけるという事もあるが、学生時代からほぼ毎年、年数回写生に出かけている。数年前までは中国の風景を描くことが多かった、中国では各地を回ったが主に蘇州・重慶で取材すること多かった、現地で見た風景のスケールの大きさや人々の日常の生活、街並みの色彩や形・文化の違いに目をとられたし実際よくモチーフとして作品にしてきた。そのおかげか、見慣れている身近な日本の風景の美しさに気づかされたような気がする。

### 取材・写生

取材では特別これという目標を持たずに簡単な写生用具だけを持ち歩く事から始める、目に飛び込んでくる風景を頭の中を真っ白にして見つめる事で受けたイメージや具体的な形や色彩をスケッチブックに写し取る、まずはコンテや水彩絵具で色彩のみによるクロッキーを行い、次に鉛筆によってより具体的な形を写し取る。現場は変わる、今日見て感じた感動が明日あるとは限らない、出会いを大切にしたい。時には色であり線であり面や構図であったりする、その時々でそれぞれの現場が独自の美しさを見せてくれ感動を与えてくれる。写生ではなるべく多くの要素を持って帰れるよう心掛けている。(図1・2・3・4)

### 小下図の制作

先ずアトリエに取材してきたクロッキー・写生・写真を広げ画用紙・和紙・色セントを置き案案を始める、鉛筆・水彩絵具・墨・コンテ等で簡単なエスキースから始め徐々にイメージを固めてゆく、数点

に絞ったところで選んだ物を徹底し描写してゆき、具体的な制作の工程がイメージできるまで表現する。自分としてはこの作業が一番緊張するし力が入るところである、1点の作品につき2・3枚程度描く、作品にもよるが1週間から10日位だろうか。(図5・6・7)

### 本紙制作

作品8は2008年の研究作品で、夏の白川郷でブナ林を取材したもので、木々の鮮やかな緑の葉とその緑に包まれた黒い幹や枝の線や形が印象的だった。制作では一枚一枚の葉の形と緑をベースにして、幹を川の字に並べ構成した、最終的には最初受けたブナ林のイメージに近づけるようなるべく余計な形や説明は排除しシンプルで単純な画面になるよう心掛けた。作品9は2009年の研究作品で、春の妙高高原で取材したものの、朝霧の中に浮かんだ葦のシルエットを表現してみた。早朝、宿の近くにある池に出かけた、霧が深かった、僅かに水草や葦のシルエットが見えた、やがて霧が晴れ朝日に光る水面と水草の新芽と枯れた葦がくっきりと姿を現した。水面の白をバックにした葦の塊がまるで友禅の紋様のように感じた。制作では葦の茎と新芽・水面の白色とで構成した。作品10は2010年の研究作品で、雪解けの乗鞍高原のゲレンデで取材したものの、黄土色の大地と朝露に湿った黒い林、そして白い空のコントラストが単純な構図ではあるが自分の求めていた道に見えた。制作では足元の枯れ草で覆われ遥か彼方まで続く道の表情と色彩を細密に表現することにした。

最近の制作を通して、まだまだ多くの感動を与えてくれる風景があるはずだ、身近で日々目にしている風景の中にも美しさや感動を見出して作品にしてゆきたいと思っている。

(にしで・しげひろ 日本画)



図1 鉛筆写生



図2 鉛筆写生



図3 鉛筆写生



図4 「道」現場クロッキー



図5 「葦」小下図まえの階段



図6 2010年研究作品小下図「道」



図7 2010年小下図12



図8 2008年研究作品「樹」50号



図9 2009年研究作品「葦」150号



図10 2010年研究作品「道」150号